九州大学総合研究博物館研究報告第15-16合併号
Bulletin of the Kyushu University Museum
No.15-16, 2018, pp.69-85

九州大学総合研究博物館所蔵・歴史的木製什器コレクションの価値と課題

新井　竜治[1)]・三島美佐子[2)]

[1)] 芝浦工業大学・デザイン工学部
[2)] 九州大学総合研究博物館・開示研究系

要旨：筆者らは、九州大学総合研究博物館が救出した、九州大学箱崎キャンパスの工学部・理学部及び馬出キャンパス（病院地区）の医学部などの旧校舎で使用されていた木製什器コレクション約350点について、2016年１月25～26日に実地調査を実施して、その学術的価値・実用的価値などを評価した。また合わせて、同コレクションの回収方法・保管方法・資料状態・付随資料についても評価した。同コレクションは、学術的にも実用的にも非常に高い価値を有しているが、その保全管理面などにおいて多くの課題を抱えていることが明らかになった。本稿は、同調査の報告書に基づき、論点を整理・統合して、加筆・修正を行ったものである。

キーワード：木製家具、学校家具、事務家具、歴史的家具、展示什器

１．はじめに

1.1. 研究目的

九州大学のキャンパス移転計画の実施に伴い、同大の六本松キャンパス、箱崎キャンパス、馬出キャンパス（病院地区）などの旧校舎で使用されていた木製什器が大量に残置・破壊・廃棄された。九州大学総合研究博物館では、古くは旧帝国大学時代から使用されてきた、これらの木製什器の文化財的価値をいち早く認識して、その廃棄什器の救出計画を立案して、回収作業を実施した[1]。その結果、2015年度末時点で、九州大学箱崎キャンパスの工学部・理学部及び馬出キャンパス（病院地区）の医学部などの旧校舎で使用されていた木製什器約350点が無事回収された[2]。しかし、これらの木製什器コレクションは、保存されているとは言い難く、大部分は一時保管（仮置き）されている状態であった。

筆者らは、これらの木製什器コレクションを実地検分して、その学術的価値・実用的価値などを評価した。また合わせて、同コレクションの回収方法・保管方法・資料状態・付随資料についても評価した。

その実地調査に基づき、本稿では、九州大学総合研究博物館が救出した、九州大学箱崎キャンパスの工学部・理学部及び馬出キャンパス（病院地区）の医学部などの旧校舎で使用されていた歴史的木製什器コレクション（約350点）の学術的価値・実用的価値などを明らかにすることを第一の目的とする。

そして、当該の歴史的木製什器コレクションの保全管理面などにおける諸般の課題を明らかにすること、それと合わせて、課題解決のために有効と考えられる提言を行うことを第二の目的とする。

1.2. 研究方法

九州大学総合研究博物館が救出した、九州大学箱崎キャンパスの工学部・理学部、馬出キャンパス（病院地区）の医学部などの旧校舎で使用されていた木製什器コレクションの実地調査は、2016年１月25・26日に実施した。その木製什器が一時保管されていた場所と概要は、表１～３の通りである[3]。なお、2018年度に移転予定である箱崎キャンパスの農学部・文学部の木製什器の回収が成功すれば、九州大学総合研究博物館が救出した木製什器コレクションの最終的な総数は1,000点を超える見通しである。

表１　旧工学部本館に一時保管された木製什器類

階	室名	木製什器名
４階	会議室	旧工学部会議室（教授会室）
３階	常設展示室	展示／レスキュー家具類
	廊下	旧理学部地球惑星科学科標本棚
	列品室	旧工学部資源資料展示室移設
２階	廊下	回収家具およびリペア品
	工作室	回収家具リペア品使用例
１階	廊下	回収家具類／中山家寄贈家具（棚類）
地階	什器室大	キャンパス内からのレスキュー家具類
	什器室小	キャンパス内からのレスキュー道具類
	工学資料ピット小	工学部工場資料および具材／県庁具材

表２　旧工学部３号館に一時保管された木製什器類

階	室名	木製什器名
各階	什器仮置室	2015年度の理学部からの回収家具類
１階	岩石標本室	理学部所蔵岩石・石炭資料標本の標本棚（※）

※石炭資料部分は目視確認のみ実施。

表３　旧応用化学棟に残置された木製什器類（※）

階	室名	木製什器名
各階	各室	造作書棚
最上階	階段教室	教卓・教壇・黒板・学生用机
	図書室	金属製書架

※旧応用化学棟は、残置された木製什器類共々、2017年に解体撤去された。したがって、表３記載の木製什器類は回収されなかった。

２．歴史的木製什器コレクションの学術的価値

2.1. 研究資料的価値

九州大学総合研究博物館が救出した、九州大学箱崎キャンパスの工学部・理学部及び馬出キャンパス（病院地区）の医学部などの旧校舎で使用されていた歴史的木製什器コレクション(約350点)の学術的価値として、まず研究資料的価値を挙げることができる。その中でも特に、家具史・インテリア史・建築史の歴史資料的価値と大学史・教育史の歴史資料的価値について、以下に述べる。

2.1.1. 家具史・インテリア史・建築史研究の歴史資料的価値

a. 家具現物と証拠資料による包括的歴史資料

九州大学箱崎キャンパス工学部・理学部・農学部・文学部、馬出キャンパス（病院地区）医学部などの旧校舎で使用されていた木製什器は、明治末期・大正期・昭和戦前期・戦後期の学校用及び事務用の木製家具の変遷を知ることができる大変貴重な歴史資料である。特に、明治末期・大正期・昭和戦前期・戦後期の日本の木製家具の現物が、これほど大量に一つの場所に収蔵されているということは、全国的に見ても非常に珍しいことである。これが第一の大きな特徴である。

それと合わせて、個々の木製什器を特定することができる備品番号プレートが大部分のものに附されていること、その備品番号に対応した、購入時期・材料・寸法等を記した備品台帳（カード式帳簿）がほぼ完全に保存されていること、競争入札記録・建物設計図・家具配置図などの付随情報が九州大学大学文書館に収蔵されていて容易に調査できることなど、モノの歴史研究にとって不可欠である文字・絵図による証拠資料が十分に存在していることが、本資料の第二の大きな特徴である。

具体的事例を一つ記す。戦後日本において事務用家具の主流が木製から金属製に移り変わったことは事実として一般的に認識されている[4]。しかし、それがいつ頃起こったのかについては、全く明らかにされていない[5]。これは供給者側である木製家具メーカー・金属製家具メーカー側の資料だけでは明確に述べることが出来ない命題である。そこで必要となるのが、使用者側の資料であるが、官公庁・教育機関・一般企業という使用者側の帳簿資料が長い年月に亘り、廃棄されずに保存されていることは極めて稀である。ところが九州大学においては、その帳簿資料が完全に保存されているのである。したがって、今後研究を進めることで、戦後日本において事務用家具の主流が木製から金属製に変化した時期を特定することができ、戦後日本の家具史における新たな知見を得ることができる。

それから、上述した九州大学の備品番号プレート以外に、家具メーカー名を記したネームプレートやラベルが添付されている木製什器も散見される。現状では、戦前・戦後日本の家具メーカーのカタログを網羅的に収蔵する研究機関は日本には存在しない。したがって、ネームプレートやラベルによって家具メーカー名が特定できる家具現物は、貴重な歴史資料である。

例えば、麻布区時代の「寿商店」のネームプレートが附された木製卓子（テーブル）（図１）、「コトブキ」のロゴのラベルが貼られたプラスチック製の椅子類（４本脚／１本脚十文字脚）（図２・３）などが見られたが、これらは、いずれも近代日本の歴史的家具である。

また、特許番号（patent number）を記したプレートま

図１　株式会社壽商店ネームプレート附き木製卓子

図２　コトブキ製プラスチック製椅子

図３　「イスのコトブキ」ラベル

たはラベルが貼付されている木製什器も少々見られた（図４）。この特許番号を、特許庁の特許情報プラットフォーム（J-PlatPat）の資料と照合すれば、その特許番号プレートを附された当該家具は、早くても、その特許が登録された年月以降に製造されたものであることが確定する。

図４　株式会社壽商店「新案特許複式棧附板」プレート

b. 旧工学部本館４階会議室の家具・インテリア

家具史の最近接領域であるインテリア史・建築史との関連において、歴史的に重要な家具として、その価値を認識することができるものには、以下のような特徴がある。

① 建築・室内装飾（インテリア）と一体となっているもの
② 実際に使用されてきたもの
③ 使用された後で保存状態の良いもの
④ 元来の使用された材料が良質なもの
⑤ 製作者が特定できるもの

旧工学部本館４階会議室の家具・インテリア（図５）は、上記の全項目に合致する。

特に、古典様式に準じた装飾文様が施された、会議テーブル（W1665 D755 H 745／巾5.5尺 奥行2.5尺 高2.5尺）（図６）、及びキャスター付き大型安楽椅子（ウエビングテープ＋コイルスプリング内蔵）（図７）については、「大阪三越家具製作工場製作」のプレートが附されている（図

図５　旧工学部本館4階会議室の家具インテリア

図６　旧工学部本館４階会議室の会議テーブル

図７　旧工学部本館４階会議室のキャスター付き大型安楽椅子

８・９）。ただし、大阪三越家具製作工場は20年ほど前に解散しており、大阪三越家具製作工場側の資料を追跡することは困難である[6]。しかし、当時の競争入札の記録資料、建物設計図、家具配置図、家具図などが九州大学に現存する。それによれば、応札業者は、三越、髙島屋、寿商店ほかであり、最終的に三越が落札して製作・納品した。また、競争入札の際に使用された家具図も九州大学大学文書館に遺されている（図10）。

ところで、国指定重要文化財三河家住宅（徳島市）の邸内にも、1928（昭和３）年頃の竣工当時のものと思われる大阪三越家具製作工場で製作された昭和初期の家具一式が保存されている。この三河家住宅の施主の三河義行は、1887（明治20）年、徳島県名西郡上分上山村（現・神山町）の旧家に生まれた。この義行は三河家の養子となり、1913（大正２）年に九州帝国大学医科大学を卒業し、1922～24（大正11～13）年、ドイツに留学してベルリン大学で学んだ。一方、三河家住宅を設計した木内豊

図８　会議テーブル「三越家具製作工場製作」プレート

図９　キャスター付き大型安楽椅子「三越家具製作工場製作」プレート

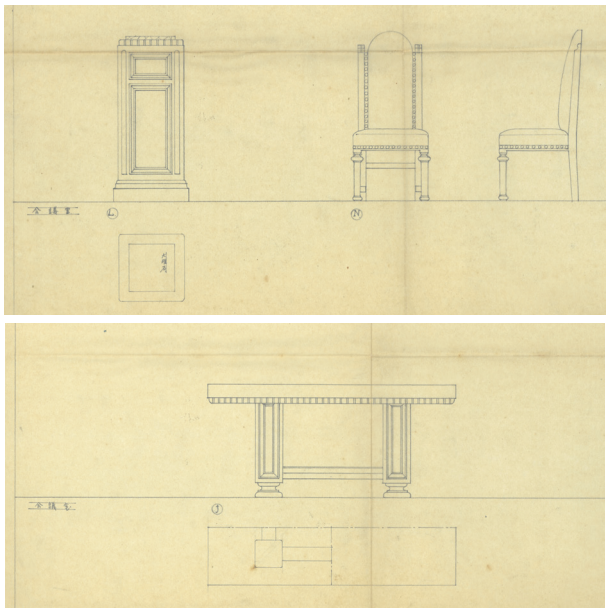


図10　旧工学部本館4階会議室の家具図（九州大学大学文書館所蔵）
上：フラワースタンドと椅子、下：卓子

次郎は、1890（明治23）年に生まれ、徳島県立工業学校

建築科を卒業して、1922～27（大正11～昭和２）年にライプチッヒ大学で学んだ。三河義行と木内豊次郎は、ドイツで知り合いとなった。そして、木内豊次郎は帰国後、三河義行の自邸を設計することになった。この九州帝国大学で学んだ三河義行の自邸（重文）の主要な家具こそが、大阪三越家具製作工場で製作されたものであった[7]。

旧工学部本館４階会議室の家具と国指定重要文化財三河家住宅の家具とを単純に比較することはできない。しかしながら、少なくとも、旧工学部本館４階会議室の家具は、国指定重要文化財三河家住宅の竣工当初の家具を製作した工場と同じ工場で製作されたものであることは、確かなこととして明記されるべきである。

c. 旧工学部本館列品室の木製展示什器

旧工学部本館の列品室に置かれている木製展示什器は、

図11　旧工学部資源資料展示室（旧工学部本館列品室保管）の木製展示什器

図12　木製展示什器の下台内部の引出

図13　木製図面保管庫

旧工学部資源資料展示室の木製展示什器であった。これらの木製展示什器は、表面材がナラ材無垢板であり、引出内部が杉材無垢板であるというように、使用された材料が良質であること、開扉の中の引出前板の塗装の劣化が殆ど見られないこと、使用されている金具の装飾が豊かであることなどを勘案すると、大変状態の良い貴重なものであると言える（図11・12）。

また、ナラ材無垢板で製作された図面保管庫なども、材料が良質で、構造的にもしっかりしたものである（図13）。

このように、旧工学部本館の列品室に置かれている木製展示什器は、木材（ナラ材無垢板の大量使用）・塗装・金具などの点で、非常に貴重なものである。

ただし、これらの木製展示什器の内部に保存されている「旧工学部資源資料」については、筆者らはその専門的知識を持ち合わせていない。そのため、これらの木製展示什器内に収蔵されている「旧工学部資源資料」については、科学史・技術史の学会員である専門家による評価をさらに実施する必要がある。

d. 旧応用物質化学機能教室の木製什器

応用物質化学機能教室（応用化学教室）の建物は映画セットにも使用された昭和戦前期の特徴を有する建物であった。この建物内に残置された造付書棚は、保存状態が良く、また使用されている材料も良質であることから、保存・活用されることが期待された（図14）。ただし、この造付書棚は大型家具であり、各室の壁面に固定されていたために、搬出するのは容易ではないと想像された。

また、最上階の階段教室は、学生用席、講壇、黒板枠などのすべてが木製でできた、趣のある大教室であった

図14　旧応用物質化学機能教室の大型木製造付書棚

図15　旧応用物質化学機能教室の階段教室

図16　旧応用物質化学機能教室の階段教室の机の跳上げ式甲板

（図15）。学生用席の木製家具は、横長のベンチの背裏に、後席の人が使用する跳上げ式の机の甲板が付いたものであった（図16）。また、木製の講壇には、メダル型や溝彫りなどの古典的な装飾文様が施されていた（図17）。

しかしながら、2017年、当該「応用物質化学機能教室」は、そこに残置された造付書棚、階段教室用木製什器などと共に、取り壊されてしまった。

e. 同等品発注方式の事例

救出された木製什器の中には、数多くの木製の標本棚がある。旧工学部本館３階廊下などに置かれている木製の標本棚の中には、その外形（全体の形状と寸法）と表面木材樹種は類似しているが、内部木材、構造、塗装色、把手形状などが微妙に異なるものが散見される（図18）。

外形と表面木材樹種が同じでも、内部材料・構造・塗装色・把手形状などの細部が異なる木製の標本棚が蓄積されてきた背景には、九州大学における木製什器の追加発注に際して、以下のような発注方法が存在していたのではないかと推定される。

「オリジナルモデル」→「同等品」の発注→「落札・納入業者の関連工場の製品」の納入→「同等品」の蓄積

図17　旧応用物質化学機能教室の階段教室の木製講壇

図18　木製標本棚（旧工学部本館3階廊下）

旧工学部本館地階にある備品台帳（カード式帳簿）には、各木製什器の「購入時期」「外形寸法」「表面木材樹種」が、主として記されている。このカード式帳簿に記載された事項が、納入業者の納品書に基づいて記されたものであったにせよ、発注者側である九州大学の発注書に基づいて記されたものであったにせよ、発注者側にとっては、外形寸法と表面木材樹種だけが問題であったことを示している。そしてそれ以外は、納入業者の自由裁量に委ねられていたと思われる。

このような状況下では、外形（全体の形状と寸法）と表面木材樹種だけは指定通りであるが、内部材料・細部構造・塗装色・把手形状などが異なるものが、学内に蓄積されることになる。つまり、同じ外形と表面木材樹種の「同等品」の群れとなるのである。

そしてこのことが、九州大学における外見上の「同等品文化」「均質文化」を生み出したと言える。しかし実際には、細部の内部材料・構造・塗装色・把手形状などは異なっており、「大同小異」の様相を呈しているという、非常に興味深い状況を生み出したのである。

2.1.2. 大学史・教育史の歴史資料的価値

a.『九州大学百年史写真集』収録写真との比較

『九州大学百年史写真集』[8]の第２章「九州帝国大学の創立と発展：1911-1926」には、工科大学、農学部、医学部、法文学部の創設期の講義室、実験室、資料列品室、図書室などの内部写真が載録されている。これらの写真からは、九州帝国大学の創設期の教育設備機器の様子を窺い知ることができる。

そして、九州大学総合研究博物館が救出した、九州大学箱崎キャンパスの工学部・理学部及び馬出キャンパス（病院地区）の医学部などの旧校舎で使用されていた木製什器コレクションの中には、『九州大学百年史写真集』に掲載されている写真に写っているものと、とてもよく似た木製什器が含まれている。

例えば、「工科大学採鉱学科応用地質学列品室」（大正５年）[9]に写っている木製展示什器と比較的よく類似した木製展示什器が、当該歴史的木製什器コレクションの中に見られる（図19・20）。ただし、両者を見比べると、下台の扉の有無や、細部の意匠・構造などに若干の相違があることが判る。これは、前述の「同等品発注方式」によって生じた差異であると考えられる。

図19　旧工学部資源資料展示室（旧工学部本館列品室保管）の木製展示什器

図20　工科大学採鉱学科応用地質学列品室（大正5年）

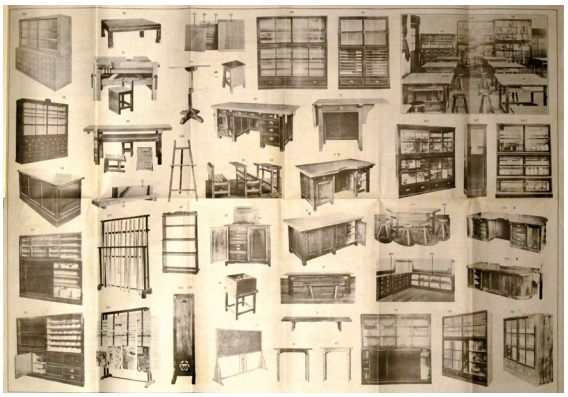
このように、当該歴史的木製什器コレクションは、九州帝国大学創設期の記録写真に写っている教育設備機器の実際を知ることができる貴重な実物資料であると言うことができる。

なお、『九州大学百年史写真集』所収の写真に写っている木製家具と当該歴史的木製什器コレクションの木製家具との詳細な比較対照作業は今後の課題としたい。

b. 近江屋家具工作所「型録」との比較

合資会社近江屋家具工作所（本社新潟市）の戦前期の「型録」（以下「型録」と略記）によれば、同社は和洋家具、文化台所、学校々具、運動具、店頭設備、図案設計、窓飾・敷物・壁紙、室内装飾を取り扱っていた。そして当時は、宮内省御用達、新潟県指定各学校御用達であった。

この近江屋家具工作所の「型録」に載録された木製什器と、九州大学総合研究博物館の歴史的木製什器コレクションの木製什器とを比較すると、両者間で比較的よく類似している意匠の木製什器が見られる（図21）。



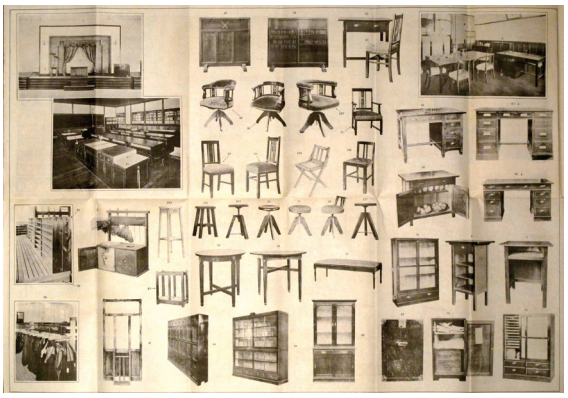


図21　近江屋家具工作所「型録」（戦前期・発行年不詳）

つまり、当該歴史的木製什器コレクションは、戦前期の木製家具製作所の「型録」に掲載された学校々具の実際を知ることができる貴重な実物資料であると言うことができる。

なお、「型録」掲載の木製家具と当該歴史的木製什器コレクションの木製家具との詳細な比較対照作業は今後の課題としたい。

c. 木檜恕一著『近代の事務家具』（博文館1930年）との比較

大正期・昭和戦前期の木材工芸界を理論面から強力に先導した東京高等工芸学校木材工芸科教授の木檜恕一は、1930（昭和５）年に『近代の事務家具』を博文館から著している。同著には、当時の木製の事務家具（オフィス家具）の家具図が多数収録されている。その品目は、①机と卓子、②椅子と腰掛、③棚と戸棚、④函と箪笥、⑤洋傘立外套掛と衝立である。これらの戦前期の事務家具（オフィス家具）は、大学事務室や教員研究室などにおいても使用されたものと考えられる。

この木檜恕一著『近代の事務家具』に掲載された木製の事務家具の家具図と、九州大学総合研究博物館の歴史的木製什器コレクションの木製什器とを比較すると、両者間で比較的よく類似している意匠の木製什器が見られる（図22・23）。

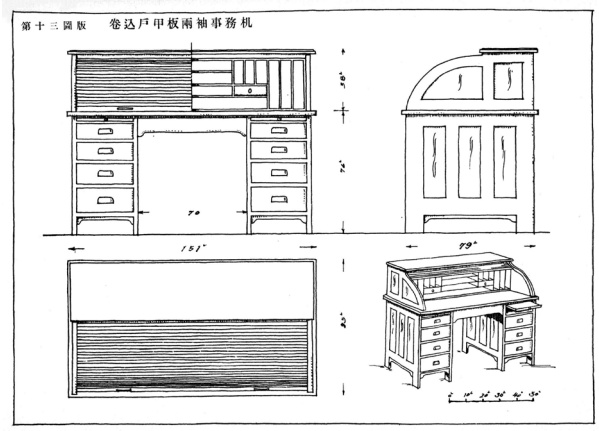


図22　巻込戸甲板両袖事務机（木檜恕一『近代の事務家具』第13図版）

図23　巻込戸附き両袖机

この場合も、当該歴史的木製什器コレクションは、戦前期の大学事務室や研究室で使用された木製事務家具の実際を知ることができる貴重な実物資料であると言うことができる。

なお、木檜恕一著『近代の事務家具』掲載の木製家具と当該歴史的木製什器コレクションの木製家具との詳細な比較対照作業についても今後の課題としたい。

2.2. 教育資料的価値

当該歴史的木製什器コレクションのもう一つの学術的価値として、教育資料的価値を挙げることができる。その中でも特に、高等教育的価値と生涯学習的価値について、以下に述べる。

2.2.1. 高等教育的価値

当該歴史的木製什器コレクションには、工学系・芸術系・歴史系などの学生の実習教材としての高等教育的価値がある。

当該歴史資料群「木製什器」は、モノの歴史研究の実習教材として利用することができる。また、実測図をCADで起こさせることによりCADソフトの習熟を促すという教育的効果もある。また、九州福岡地区の各大学・学部・学科と連携して、モノの歴史研究のワークショップを開催することも可能である。

具体的には、九州大学工学部建築学科、九州大学芸術工学部環境設計学科、九州大学芸術工学部工業設計学科、九州産業大学工学部住居・インテリア設計学科、九州産業大学芸術学部デザイン学科、九州産業大学美術館などとの連携が考えられる。

そして、具体的な作業としては、木製什器（木製家具）の採寸・三面図（平面図・正面図・側面図）の手描き・三面図のCAD起こし・三方向（平面・正面・側面）からの写真撮影・材料検分・塗装検分・細部構造解析・記録のデジタル化などが想定される。

その際、後段に記述するような「調査事項フォーマット」（表６）を予め作成しておくと有益であろう。

2.2.2. 生涯学習的価値

当該歴史的木製什器コレクションにはまた、一般公衆を対象とする生涯学習的価値もある。

前述のとおり、九州大学総合研究博物館の歴史的木製什器コレクションは、近現代日本の家具・インテリア・建築の歴史を知る上で、大変貴重な歴史資料であるので、研究者・大学関係者のみならず、一般公衆の興味を掻き立てるものでもある。したがって、この歴史的木製什器コレクションを文化財・公共財として一般公衆に展示公開、教育普及することは、このコレクションの持つ一つの重要な役割である。

３．歴史的木製什器コレクションの実用的価値

3.1. 循環型社会の資源的価値

九州大学総合研究博物館の歴史的木製什器コレクションの実用的価値として、まず循環型社会実現のための資源的価値を挙げることができる。

当該歴史的木製什器コレクションの中で、歴史的な画期を示す指標的価値のあるもの、保存状態の良好なもの、元来の品質の良いものなどは、純粋な歴史資料として収集保存・展示公開するべきであろう。その際、経年劣化が著しいものについては、記録をしっかり残した上で、最小限の修復を行う。

しかし、それ以外のものについては、きちんと記録を残した上で、修復もしくは修理を施して、九州大学総合研究博物館の展示什器として再利用することができる。

例えば、2016年１月に開催された九州大学総合研究博物館の企画展「九州大学歴史的備品再生プロジェクト／再生歴史的家具展示」は、かつての九州大学の研究室を再現するための大道具として、歴史的木製什器コレクションの一部の木製什器を修復・修理して活用した事例である。このような企画展の内容が、今後常設展示とされていくことが期待される。

現在、九州大学総合研究博物館は、九州大学旧工学部本館の３階に置かれているが、この旧工学部本館の全館が九州大学総合研究博物館の分館として再利用されることになれば、救出された木製什器を博物館全館の展示什器として再利用することができる。その際には、旧工学部本館の全館博物館化計画の初期段階から、これらの木製什器を組み込んでいくべきである。

また、伊都キャンパスに計画されている（新）九州大学総合研究博物館の展示什器としても、これらの木製什器を再利用することができる。その際にも、設計計画の初期段階から、これらの木製什器を組み込んでいくべきである。

このような、木製什器を博物館の展示什器として活用した先行事例として、東京大学総合研究博物館「インターメディアテク」（JPタワー／KITTE内）における、木製什器の展示什器としての再利用を挙げることができる。

3.2. 商用的価値

次に、当該歴史的木製什器コレクションの実用的価値として、その商用的価値を挙げることができる。

3.2.1. 永年貸与と寄付金獲得

当該歴史的木製什器コレクションの一部について、その記録を残して、修復・修理した後、九州大学のブラン

ドイメージを利用して、プレミアム品として、希望者に永年貸与する代わりに、九州大学に寄付金を納付してもらうという方策がある。これは、海外にも類例を見ない、先進的アイデアである。

3.2.2. 売却と利益還元

当該歴史的木製什器コレクションの中には、歴史的にも、品質的にも、必ずしも博物館で保存・公開する必要のないものも存在すると考えられる。

そのような場合には、記録を残して、修理した後、九州大学のブランドイメージを利用した中古家具として、指定販売特約店を通して、市場において販売することも視野に入れる必要が出てくるだろう。そして、その売却によって得た利益を九州大学に還元する仕組みを確立することが望まれる。

その際、後述する『九州大学総合研究博物館所蔵・歴史的木製什器コレクション』（仮題）を、その木製什器に添付すれば、その木製什器の由縁が損なわれることなく、購入者の次代にまで継承されることになる。このようにして、当該歴史的木製什器コレクションの一部が、社会において大切に保存され、有意義に活用されることになると期待される。

図24　旧工学部本館地階に一時保管された木製什器類

図25　旧工学部3号館に一時保管された木製什器類

4．歴史的木製什器コレクションの課題と提言

4.1. 回収・保管における課題と提言

4.1.1. 保管環境の課題と方策

歴史的木製什器コレクションの総点数は最終的に1,000点を超える見込みである。これらの木製什器は特に大型であるため、その保管場所の確保が最も困難な課題の一つである。

現在までに回収された歴史的木製什器は、旧工学部本館、旧工学部３号館、第３分館（旧工学部食堂）などに分散して保管されている。さらに今後、農学部・文学部からの木製什器の回収も控えているので、さらなる保管場所が必要になってくる。

残念ながら、2016年１月末時点において、これらの歴史的木製什器コレクションの保管環境は、旧工学部本館４階の会議室と３階の列品室を除いて、極めて劣悪であった。そのため、カビの発生、木材の割れ・反り、接着剤の劣化による接ぎ切れ、塗装膜の劣化による木肌の露出など、様々な経年劣化の加速が危惧された。

特に、旧工学部本館地階及び旧工学部３号館に一時保管（仮置き）された木製什器類は、ほとんど２～３段に積み重ねられていた（図24・25）。そのため、重ね積みによる打痕・引っ掻き傷の増加も危惧された。

これらの状況については、一日も早い改善が望まれる。少なくとも木製什器が１台ずつ平置きできるスペースの確保が必要である。

4.1.2. 今後の回収方法における課題と方策

一般的に、歴史資料群は、種類毎に、また時代別に分別されて保管されていると、調査・研究が捗る。本資料群「木製什器」についても、種類毎に、また時代別に分別・保管されるべきである。

今後、農学部・文学部の木製什器を回収する場合、搬出・移動・一時保管場所への搬入作業に際して、最初か

ら種類毎に、また大正期・昭和戦前期・戦後期などに大別して、時代別に分別・保管することを強く期待する。

また、すでに救出されて、現在、一時保管中の木製什器（工学部・理学部・医学部のもの）は仮置きであるので、近い将来、別の場所に移動することになっている。その際には、上記のとおり、種類毎に、また時代別に区分し直して保管することを強く期待する。

そのためには、まず木製什器に附された「備品番号プレートによって年代が一目瞭然に判別できる表」を作成しておく必要がある。そして、搬出業者に作業指示を出す貼紙を各木製什器に貼付する際、各木製什器の時代区分の確認が現場において出来るように、その貼紙を貼る人々に、この表を携行させて時代区分作業をさせる必要がある。またこの表は、その後の調査・研究においても随時携行すると有益である。

4.2. 資料状態の課題と提言

4.2.1. 意匠・材料・技術・製造業者・流通経路の特定の問題

今後、歴史的木製什器コレクションを調査研究する中で、意匠・材料・技術・製造業者・流通経路を特定する作業に直面する。残念ながら現状は、これらの作業の緒に就いたばかりである。

a. 意匠の特定

歴史的木製什器コレクションの各種木製什器の意匠上の特徴を把握するに当たり、その意匠が、果たして当時一般的に普及していたものであったのか、それとも特別注文に応じて製作されたものであったのかを明確にする必要がある。

前述の旧工学部本館４階の会議室の家具一式のように、競争入札に伴う設計図・見積書などの資料が遺されている故に、特別注文されたものであることが確定できるというものは少ない。

そこで、製造当時の木製家具メーカーの製品カタログと歴史的木製什器コレクションの各種木製什器とを比較検討する必要がある。ただし、戦前期の木製の事務用家具・学校用家具などを製造していた木製家具メーカーのカタログは僅少である。今後、これらのカタログを網羅的に収集することが求められる。

また、前述の「同等品発注方式」で追加購入された場合であっても、元々何を雛型としたのかを明らかにすることが求められる。

b. 材料の特定

木製什器の主な材料は、木材・塗料・金具である。

使用された木材の種類を特定するためには、林学・木材科学の研究者及び実務家の協力が必要である。また、当該コレクションの一部に、プラスチックを使用した椅子（コトブキ製）などがある。その場合も、専門の研究者及び実務家の協力を要する。

塗料・塗装方法を特定するためにも、木材の塗料・塗装の研究者及び実務家の協力が必要である。

使用された金具の意匠・材料・機構などの特定についても、専門の研究者及び実務家の協力が不可欠である。

c. 技術の特定

歴史的木製什器コレクションの各種木製什器の製作技術については、技術別に分類した上で、時代別・地域別の特徴を把握する必要がある。

具体的には、からくり錠の構造、無垢板の巾接ぎ方法、縦方向の継ぎ方、積層合板の積層枚数・積層方向など、詳細に調査する必要がある。

また、特許（パテント）登録された技術が使用されていることが、特許番号プレートによって明らかである場合は、その内容の詳細についても、特許庁の特許情報プラットフォーム（J-PlatPat）において確認して付記する必要がある（図４）。

d. 製造業者・流通経路の特定

前述の旧工学部本館４階の会議室の家具一式のように、競争入札が実施された木製什器については、応札業者・落札業者・落札価格・製造業者などの情報が明らかである。

また、木製什器自体に家具メーカー名を記したプレートやラベルが附されているものが若干見られる。その場合は、少なくともそれらの木製什器を製作した製造業者を特定することができる。

しかし、それ以外の歴史的木製什器コレクションの大部分については、その製造業者・流通経路を明らかにする作業は未着手の状態である。

そこで、まず備品台帳（カード式帳簿）から納入業者

が特定できるものがあれば、それらの納入業者を一覧表に整理することから始めるべきである。その納入業者を追跡調査することによって、残りの歴史的木製什器コレクションの製造業者・流通経路を明らかにすることができるものと期待される。

4.2.2. 資料的価値のバラツキ問題と解決方法（案）

長い年月の間、使い続けられた木製什器は、製造時に使用された材料（木材・塗料・金具）の品質、使用者による扱い方、保守点検・修繕の有無などによって、その資料的価値にバラツキが生じる。当該の歴史的木製什器コレクションにおいても、同様の理由によって、資料的価値にバラツキがある。

これは私案であるが、歴史的木製什器コレクション（最終総点数1,000点超）について、表４に示す３段階に区分して、その区分ごとに適した活用方法を見出しては如何であろうか。

表４　歴史的木製什器コレクションの状態と活用方法（案）

ランク	状態	活用方法
A	良品	修復して保存・展示
B	普通品	修復もしくは修理して、再利用または永年貸与
C	劣悪品	修理もしくは未修理のまま売却、または修復部材として活用

第２章で述べた、歴史的な画期を示す指標的価値のあるもの、保存状態の良好なもの、元来の品質の良いものなどが、A ランクに当たる。これらは、純粋な歴史資料として収集保存・展示公開するべきであろう。修復が必要であれば、記録を残した上で、最小限の修復を行う。

B ランクはボリュームゾーンであり、最も点数が多いと想定される。品質的には中級（普通品）である。これらは、記録をしっかり残した上で、修復・修理を施して、九州大学総合研究博物館の展示什器として、また九州大学各学部の什器として再利用する。または、寄付金の代わりに希望者に永年貸与する。

C ランクのものは、歴史的にも、品質的にも、必ずしも博物館で保存・公開する必要のないものである。C ランクのものの内、比較的良品のものについては、九州大学のブランドを利用した中古家具として、指定販売特約店を通して、市場で販売して、その利益を九州大学の運営費に算入する。そして、C ランクのものの中で、いくら修理しても、木製什器としての体を成さないものについては、A ランク品・B ランク品の修復のための取替え部材として保管して、必要に応じて活用することが可能である。

4.2.3. 修復（Restoration）・修理（Repair）における注意点

当該歴史的木製什器コレクションは、現時点では修復・修理が全く施されていないものが殆どである。繰り返しになるが、歴史研究の視点から言えば、まず修復・修理前の状態をきちんと記録する必要がある。その上で、個別に事案を検討して、修復するか、修理するか、修復のための取替え部材として保存するか等を決定する必要がある。

さて、今回調査した木製什器の中で、奇妙な棚を見つけた。外見はナラ材無垢を使用しており、形状・塗装などから判断して、古いものであると認識した。しかし内部には、ラワンベニヤを表面に貼った積層合板が使用さ

図26　部分修理された天板の内部（ラワンベニヤ板で部分修理）

図27　収納棚の内部の底板（元来は杉材無垢板の巾接ぎ）

れていた（図26）。備品番号からも古いものであると確認できるが、昭和戦前期にラワンベニヤが流通していたのであろうかと疑問に思った。調査を進める中で、別室に保管されているものの中に類似した棚を見つけた。その棚の内部には、杉材の無垢板が使用されていた。無垢板は木理方向と直角方向に大きく伸び縮みするので、経年のため、木理方向に沿って割れていた（図27）。伝統的な日本の家具修理の方法は、この無垢材のヒビ割れた部分に、同材の薄板を掻き込んで修理するというものである。ところが、上述の棚は、この割れた杉材の無垢板を全部取り除いて、その部分を、ラワンベニヤなどを表面に貼った積層合板に取り替えるという修理を施したようである。つまりこれらの棚のオリジナル品は、表面材がナラ材無垢板、底板・背板・天板が杉材無垢板で製作されていた。しかし、約100年の間に、杉材無垢板が割れたために、その部分だけ積層合板に置き換えるという、オリジナルの良さを損なう部分修理をしていたのではないかと考えられる。

九州大学総合研究博物館として収集保存・展示公開するものは、オリジナルの姿（原形）を留めているものであり、なおかつ保存状態の良いものとするべきである。したがって、上記のオリジナルの姿を残しているものについては、杉材無垢板のヒビ割れ部分に杉材の薄板を掻き込んで、カンナで削って平滑にするという技法によって、オリジナルの姿を残すような修復を施し、最重要の保存品とするべきであろう。

そして、代替材によって部分修理を施してあるものについては、杉材無垢板を使ってオリジナルの通りに修復するべきか、それともそのまま簡単な追加修理を施して、再利用または永年貸与するべきか、事案ごとに判断するべきである。一般的には、類似するものが沢山ある場合は、修復せずに修理品とすべきであろう。そして同じものが他に見当たらない場合に限り、オリジナルの通りに修復・復元するべきである。

なお、今回の調査の過程で、楢（しな）ベニヤ、ラワンベニヤ、ブナベニヤなどを識別した。また、これらのベニヤ板（突板）を表面に貼った、三層の積層合板が引出の底板に使用されていることが多いことも判った。

1923（大正12）年７月、新田ベニヤ製造所発行『ベニヤ板定価表』を見ると、新田ベニヤ製造所では、楢（なら）、栁（たも）、嚶（あさだ）、樺（かば）、栓（せん）、楢（しな）、黄檗（きはだ）、楓（もみじ）のベニヤ板（突板）を製造していたことが判る[10]。また、杉、神代杉、茶神代杉、屋久杉、檜のベニヤ板（突板）も注文に応じて製作していた。同社の所在地は以下のとおりである。

工　場：北海道十勝国止若
本　店：大阪市南区難波久保吉町
出張所：大　阪：大阪市南区難波久保吉町
　　東　京：東京市京橋区加賀町
　　小　樽：小樽市稲穂町
　　福　岡：福岡市博多上土居町
　　名古屋：名古屋中区笹島町

これらのことによって、大正期末には、楢ベニヤは流通していたことが判る。しかし、ラワンベニヤ、ブナベニヤは昭和期に使用され始めたものではないかと考えられる。

最後に、修復・修理における仕上げ方法についてであるが、九州大学総合研究博物館の企画展「九州大学歴史的備品再生プロジェクト／再生歴史的家具展示」において再現した、教授室に置かれた修理済みの両袖机を見て、少々違和感を抱いた。この違和感は、修理された両袖机には傷が一切なかったこと、塗装色が明るかったこと、艶消し仕上げであったことなどに由来していた。

通常、アンティーク家具のビジネスにおいては、塗装色は濃いアンティークブラウン色にすることが多い。そして、長年使うと擦れて艶が出ることから、艶消しではなく、艶ありで仕上げる。また、傷はそのまま残す。または、故意に傷を増やす場合もある。前述の東京大学総合研究博物館「インターメディアテク」（JP タワー／KITTE 内）において、展示什器として再利用された木製什器は、傷がそのまま残された、艶ありの濃いアンティークブラウン色で仕上げられている。

今後、これらの歴史的木製什器コレクションの修復・修理に従事する職人の方々には、本格的なアンティーク家具仕上げの技法を修得していただく必要があると強く思う。

文化庁が管轄する重要文化財などの修理工事を請負うことができる修理工事業者は、予め研修を受けて認定された業者だけである。これらの業者は、修理工事の際のガイドラインを熟知しており、修理工事報告書の作成に

も精通している。当該歴史的木製什器コレクションの修復・修理においても、同様の修復・修理業者の認定制度が設けられることが望ましいと考える。

それから、これらの修復・修理を九州地域の木製家具産業界と連携を図って実施すれば、研究教育機関と産業界との連携を強化することに繋がるものと大いに期待される。

4.3. 付随資料の課題と方策

4.3.1. 九州大学総合研究博物館作成・発行『[九州大学] 救出木製什器・物品資料集』(初版：2015年10月)

『[九州大学] 救出木製什器・物品資料集』(初版：2015年10月）は、九州大学のキャンパス移転に伴って残置・廃棄される直前、九州大学総合研究博物館によって救出された、価値ある木製什器を分類整理して記録を付けた貴重な資料集である。これまでの一連の作業を精力的に進めて来られた志と実際の努力に敬意を表したい。

その上で、『[九州大学] 救出木製什器・物品資料集』の完成版である、『九州大学総合研究博物館所蔵・歴史的木製什器コレクション』（仮題）の制作に向けて、以下のような、「記載項目」に関する提案[11]（表５）及び「調査方法」についての提案[12]（表６）をする。

そして、この『九州大学総合研究博物館所蔵・歴史的木製什器コレクション』（仮題）は、出版・頒布されて、研究者のみならず、広く日本国民が享受できるようになることが望まれる。

4.3.2.『九州大学歴史的木製什器再生プロジェクト』（仮題）の制作・出版

全世界の装飾芸術品とプロダクトデザインの博物館・美術館に絶大なる影響力を有する、ロンドンの The Victoria and Albert Museum の British Galleries を大改装する計画と実施の全貌を記した報告書が、『Creating the British Galleries at the V&A: A Study in Museology』として発行されている[13]。同書は、現代の世界中の博物館・美術館スタッフの必読の書である。

表５　『九州大学総合研究博物館所蔵・歴史的木製什器コレクション』（仮題）記載項目（案）

項　　目	内　　容
品名	用途に基づき品名を決める。カタログ掲載品である場合はカタログに準拠する。
品番	プレート／シールなどに記された品番・カタログ記載の品番などが判れば記録する。
製作者［所］	製作者・製作所（メーカー）が判別できる場合には記載する。
寸法（サイズ）	幅・奥行・高・座高・肘高・下台高さ・下台奥行・上置高さ・上置奥行・甲板厚・天板厚などを記す。外形最大寸法値を記す。部位ごとの最大寸法があれば、それも記す。詳細な寸法は三面図に記入する。
木部形状	三面図において表現する。モールディングは断面詳細図で表現する。
材料	部位ごとに材料が違う場合は、部位ごとに記述する。修理前／修理後の相違も記す。 例）部位の名称：扉、引出前板、甲板、天板、背板、側板、笠木、貫……など。 例）修理前：甲板ナラ無垢５枚巾接ぎ。接ぎ切れ・１枚欠損のため、新規にナラ無垢材を使用……など。
構造・機能	部位ごとの構造・機能を記す。修理前／修理後の相違も記す。 例）無垢材巾接、積層合板、フラッシュ構造、ランバーコア構造……など。
塗装・仕上げ	部位ごとに違う場合は、その旨を記す。修理前／修理後の相違も記す。
椅子張地	材質・図柄・絵柄などを記す。修理前／修理後の相違も記す。
内部詰物	材質を記す。修理前／修理後の相違も記す。
家具金物	材質・形状・機能・メーカー名（判明すれば）などを記す。修理前／修理後の相違も記す。
特記事項	大きな欠損箇所・大きな修復・大きな修理箇所を記す。 例）どこが、どのように欠損していて、どのような修復・修理を施したのか。
修理担当者	家具メーカー名、修復・修理作業実施者名などを記す。
修理費用	金額、競争入札／随意契約の別、競争入札／随意契約の書類の整理記号などを記載しておく。
歴史	購入時の情報・使用状況の変遷の記録を記す。また記録の出典を明記しておく。
実測図	三面図（平面図・正面図・側面図）＋断面詳細図。 修理前／修理後の二種類を作成する。
調査員氏名	家具調査記録を付けた者の氏名・デジタル化担当者名・作図担当者名などを記す。

表６　調査方法（案）

手　順	内　　容
（１）	まずフォーマット枠だけを印刷した白紙の記録用紙を準備して、調査担当者が手書きで記録をつけながら調査する。フォーマットを決めると調査項目に漏れがなくなる。
（２）	（１）と同時に、修復・修理前の状況を詳細に写真で記録する。可能であれば三面図（平面図・正面図・側面図）の方向及び透視図の方向から撮影する（＊）。
（３）	修復・修理前の家具の三面図（平面図・正面図・側面図）＋断面詳細図のラフスケッチを描く【野帳】。
（４）	外形最大寸法・詳細寸法を採り、記録する【野帳】。
（５）	品番・寸法（サイズ）・材料・構造・機能・張地・詰物・金具などを調べ、記録する【野帳】。
	上記（４）・（５）は、修理前の三面図ラフスケッチ【野帳】の中にメモとして記録しておくと後々便利となる。
（６）	修復・修理を担当する家具業者が見ないと判らない事項もある。その場合は、家具業者が記録をつける。例えば、塗装は実際の修理時に溶剤を使って、目立たない裏側の隅で試してみないと判らないものもある。
（７）	修復・修理方針を決定する。競争入札・随意契約の仕様を決定する。
（８）	修復・修理を担当する家具業者を決定する（競争入札・随意契約）。
（９）	修復・修理作業内容を記した完了報告書を提出させる。この報告書に修理後の上記事項をすべて書かせて提出させる（表５参照）。
(10)	修復・修理後の家具の写真撮影。可能であれば、三面図（平面図・正面図・側面図）の方向及び透視図の方向から撮影する（＊）。
(11)	三面図（平面図・正面図・側面図）＋断面詳細図の修理前・修理後の清書図の作成（デジタル／手描き）（工学部・芸術工学部の学生アルバイト使用）。
(12)	手書きメモのデジタル化。調査した者が行うことが好ましい。
（＊）	撮影には、照明器具・背景の白スクリーン・高解像度カメラを体育館のような場所に常設する仮スタジオを設けると良い。そして救出家具を流れ作業で撮影する。

翻って、九州大学総合研究博物館における、歴史的木製什器コレクションに関する、今回の一連の救出プロジェクトの過程を克明に記録した『九州大学歴史的木製什器再生プロジェクト』（仮題）についても、出版・頒布されることが強く期待される。この取り組みは、同じような問題を抱えている日本及び世界の官公庁・教育機関・一般企業における木製什器の再利用計画の重要な指針となるだろう。

また、これらの著作物の売上を博物館運営経費に還流したり、救出された木製什器の修復・修理の費用に充てたりすることができるだろう。

4.3.3. 備品帳簿・競争入札記録・建物図面・家具配置図

旧工学部本館地階に保存されている備品台帳（カード式帳簿）はすべてデジタルデータ化する必要がある。もちろんオリジナルの紙媒体のカード式帳簿も貴重な歴史資料であるので、燻蒸除菌の上で保存するべきである。

また、木製什器などの競争入札記録があるものについては、前述のデジタルデータ化された備品帳簿の備考欄に、競争入札記録の保管場所を追記しておくと研究資料としての価値が増すであろう。

さらに、木製什器などが納入された建物・室内の図面が存在するものについても、前述のデジタルデータ化された備品帳簿の備考欄にその情報を追記しておくことが望ましい。

4.3.4. インターネット上でのデータの公開

紙媒体の『九州大学総合研究博物館所蔵・歴史的木製什器コレクション』（仮題）の制作と並行して、その簡易バージョンを、インターネットを通して公開することも視野に入れるべきであろう。

インターネット上で、すべてのデータを公開してしまうと、紙媒体の書籍を発行する出版社が難色を示すのではないかと危惧される。また、インターネット上のデータは、大規模災害等が発生すると消失してしまう危険性がある。やはり紙媒体に印刷したものを「主」として、仮想空間上のものを「従」とするべきであろう。

したがって、まず紙媒体の『九州大学総合研究博物館所蔵・歴史的木製什器コレクション』（仮題）の制作を優先して進め、その内容をインターネット上でどこまで公開するべきかを検討した上で、インターネット版の簡易バージョンの公開作業を進めるべきである。

5．おわりに

今回調査した九州大学箱崎キャンパスの工学部・理学部、馬出キャンパス（病院地区）の医学部などの旧校舎で使用されていた木製什器は、その年代範囲（明治末期・大正期・昭和戦前期・戦後期）・品質・量（総数1,000点超）を勘案すると、第一級の歴史資料であると言える。今後、その保存及び活用が大いに期待される。

特に、家具史・インテリア史・建築史における歴史資料としての非常に高い学術的価値が認められる。また近代日本を牽引した旧帝国大学の研究教育環境を窺い知ることができるため、大学史・教育史における歴史資料としても非常に高い学術的価値が認められる。

また、モノの歴史研究の調査実習に利用することができたり、実測図をCADで起こすことによりCADソフトに習熟させたりするという教育的価値も認められる。さらに、九州大学総合研究博物館の展示什器として再利用できるという実用的価値、プレミアムを付けて永年貸与する代わりに寄付金を納入していただくという実用的価値などが認められる。

しかしながら、これらの木製什器は、長い年月の間、実際に使用されてきたため、資料の状態が比較的良好なものから、比較的劣悪なものまで、バラツキがある。また、比較的大型の家具が多数を占め、なおかつ、その数量が膨大である。したがって、個々の木製什器の歴史的価値を評価・選別して、修復して保存・展示するもの、修復もしくは修理して再利用または永年貸与するもの、修理もしくは未修理のまま売却するもの、または単に修復部材として活用するものなどに区分することが必要である。

まずは、これまでに救出・収集した木製什器群の基礎資料化が必要であり、今後救出・収集する予定の木製什器群についても、随時その基礎資料集に追加していく作業が続くものと見込まれる。

注

1　三島美佐子・岩永省三「九州大学総合研究博物館・第一分館の刷新的利活用（1）経緯」『九州大学総合研究博物館研究報告』第12号、pp.57-66、2014.

2　六本松キャンパスの残置木製什器の回収は失敗した（前掲1）。

3　当該実地調査においては、第3分館（旧工学部食堂）に置かれた標本棚と展示ケース、及び、2018年度に移転予定である箱崎キャンパスの農学部・文学部の木製什器については割愛した。

4　新井竜治『戦後日本の木製家具』家具新聞社、pp.44-45、2014.

5　北田聖子「戦後の事務用家具標準化の出発」『デザイン理論』第55号、pp.21-35、2009. において引用されている、桧山邦祐『つくえ物語』イトーキ、pp.178-183、1979. によれば、1959-60年の金属製デスクの価格は約13,000円／台にまで低下して、木製デスクの価格は約10,000円／台にまで上昇したという。そして、そのことをもって事務用机の主流が木製から金属製へと変化した時期が1960年頃であることが示唆されている。しかし同著では、それを裏付ける出荷数量データなどは示されていない。

6　元三越製作所工場長、中林幸夫氏に確認。

7　徳島市「第6回三河家住宅保存活用検討委員会」資料「第2章　三河家住宅の概要（追加分、家具）」PDF、p.4、2014.10、https://www.city.tokushima.tokushima.jp/kankou/bunkazai_art/mikawaya_hozon.files/shakai_kyoiku45_02.pdf

8　九州大学大学文書館編『九州大学百年史写真集』九州大学百周年記念事業委員会、2011.

9　同上8『九州大学百年史写真集』、p.27、図2-045.

10　新田ベニヤ製造所『新田式ベニヤ板定価表』1923.7.

11　「家具用語」については、以下の文献に準拠した用語を使用することが望ましい。日本家具工業連合会家具用語事典編纂委員会『家具用語事典』全国家具工業連合会、第2版、2008. 剣持仁『家具の事典』朝倉書店、1986. 豊口克平『インテリアデザイン事典』理工学社、第2版、1989.

12　「家具図は三面図で記録すること」については、以下の文献を参照されたい。織田憲嗣『デンマークの椅子』初版、光琳社、1996. 再版、ワールドフォトプレス、2002. 島崎信・西川栄明・山永耕平『ウィンザーチェア大全』誠文堂新光社、2013.

13　Wilk, C. & Humphrey, N.: Creating the British Galleries at the V&A: A Study in Museology, London: V&A Publications, 2004.

Received September 1, 2017; accepted November 14, 2017

Value and Challenges of Historical Wooden Furniture Collections of the Kyushu University Museum

Ryuji ARAI[1)] and Misako MISHIMA[2)]

[1)] School of Engineering and Design, Shibaura Institute of Technology
[2)] Laboratory of Information and Multimedia Sciences, The Kyushu University Museum

Summary: By the end of the year 2015, Kyushu University Museum rescued approximately three hundred fifty historical furniture pieces that had been used in Engineering Department and Science Department at Hakozaki Campus of Kyushu University and in Medical Department at Maidashi Campus, which is known as Hospital Area of Kyushu University. The authors examined those historical furniture pieces on January 25th and 26th, 2016 to assess their academic and practical value. At the same time, the authors also evaluated rescue method, store method, condition of historical furniture pieces, and documents of the Kyushu University Historical Wooden Furniture Collections. Based on the examination on the spot, it became obvious that the collections had extremely high value for both academic and practical purposes. On the contrary, it also became clear that the collections had a lot of problems in terms of maintenance and management. This paper is a revised version of the initial report on value and problems of the Kyushu University Historical Wooden Furniture Collections.

Keywords: Wooden Furniture, School Furniture, Office Furniture, Historical Furniture, Display Furniture